

## 「DXと未来への想い」

北海道電力ネットワーク株式会社室蘭支店長（当本部理事・室蘭地区支部長）

川原 陽一（かわはら・よういち）氏



## 【略歴】

1967 年生まれ。'89 年 3 月東京電機大学電気工学科卒業、同年 4 月北海道電力株式会社入社。2007 年 7 月同釧路支店配電グループリーダー、'13 年 4 月同苫小牧支店浦河営業所長、'16 年 4 月同岩見沢支店配電部長、'17 年 6 月同本店配電部設備企画グループリーダー、'21 年 4 月北海道電力ネットワーク株式会社本店配電部スマートメーター管理センター所長、'22 年 6 月同室蘭支店長に就任。現在に至る。

室蘭市は昨年開港 150 年、市制施行 100 年の節目を迎え、また、10 月から室蘭―青森間フェリーが就航することになり、新たな未来を創っていく気運に満ちている。

150 年、100 年と一口に言っても、時代は明治初期、大正であり、鉄道の施設、石炭の積み出し、港湾の整備など、インフラ整備に向けた先人のご苦労はいかばかりであったろう。その後、これらを礎とし、鉄を中心とした工業都市としての役割を担い、現在は次世代エネルギーの鍵として期待される水素の製造・貯蔵・利活用や天然の良港を活かした洋上風力産業の集積など、未来のカーボンニュートラルに向けた取り組みを加速している。

国際的評価が高まっている室蘭工業大学は航空宇宙工学分野におけるロケット技術や人工衛星の研究が注目されており、2023 年度には超小型人工衛星の打ち上げも計画されていると聞く。また、室蘭市においては次世代交通サービスの実証実験(MaaS)や民間のロボットセンター開設が進められ、最近、最先端半導体工場の道内誘致が決まった。北海道に科学技術産業が大きく芽吹き、卒業生がこの地域で活躍し、子供たちが宇宙や先端技術に夢を馳せる、そんな時流の姿をそう遠くない未来に描きたい。

さて、現在、国において新しい資本主義の実現に向けた議論が進められており、企業の生産性向上に向けた人材育成(Rスキリング)やDX(デジタルトランスフォーメーション)の重要性が一層高まっている。「ひと」や「仕組み」に対する未来への投資と言えるかもしれないが、DX については「具体的に何をすれば良いか」との声を聞くことがある。

おさらいすると、業務の効率化を重視したIT化と比べ、DX はデータやデジタル技術を活用してビジネスモデル(仕組み)自体を見直し、顧客サービス、コスト削減、働き方などの付加価値を創出し、競争優位を確立するような「変革」に重きが置かれているようだ。

最近、電子書籍端末で読書をするようになった。紙の手触りを感じながら読むことに慣れていたこともあり敬遠していたが、縁あって試しに電子書籍端末を購入してみたところ、これが思いのほか軽量で使い勝手が良い。読み難い漢字や知らない英単語は指でなぞれば解説が出てきたり、読み返したいセンテンスもリストにストックできたりと、便利な付加機能が搭載されている。また、電子書籍のサブスク(定額で対象書籍読み放題)に加入し、普段は選ばないであろうジャンルを何気に試し読みしたところ、望外に深い感銘を受け、価値観が変容するような一冊の本に巡り合えたりもした。

無論、このことをDXと言うつもりはないが、便利さに加え、書籍との思わぬ出会いを享受できたことは、大仰な言い方をすると読書する対象や目的が大きく「変革」したように感じており、その類比から考え合わせると、DXは世に言われているとおり「現状に、どんな変革(思い)を載せた未来の姿を目指すか」のビジョンが大切なのであろう。

そして、(先の「一冊の本」の教えにより)先人から受け継いだ国土・産業に感謝し、発展させていく中で、どんな思いを載せて自然、環境、平和を守り、未来に繋いでいくか。変革に臆せず深く考え、行動していくことは、今を生きる私たちの使命・役割であるように改めて想う。